opusdei.org

オプス・デイとの出 会い、オプス・デイ とは

この記事では、まずメディア 報道の経験をお伝えした上 で、オプス・デイの本質、ビ ジョン、組織、 信者、主要 メッセージ等について述べる ことです。著者の許可を得 て、紹介します。

2022/03/17

記事PDF式

オプス・デイとは

このオプス・デイ紹介記事は、 Stella Maris誌より依頼をうけ、 2022年2月発行のVol.14号に掲載された寄稿文に、少し手を加えたものです。この記事では、まずメディア報道の経験をお伝えした上で、オプス・デイの本質、ビジョン、組織、信者、主要メッセージ等について述べることにします。

ダ・ヴィンチ・コードとオプス・デ イ

「オプス・デイは秘密結社とかカルト教団と聞いていましたが、違うようですね」と取材時に感想を述べたのは、大手出版社の週刊誌担当記者でした。

ご記憶の方も多いと思いますが、 2006年に封切られたコロンビアピク チャーズ配給の映画ダ・ヴィンチ・ コードには、邪悪な陰謀をめぐらせ ている「カトリック教会」や現実と は関係のない荒唐無形な「オプス・ デイ」が登場しました。

私は、当時、日本のオプス・デイ広報室で、メディアとの対応にあめていました。テレビ番組を含めあり、一切上のメディアから取材が中の記者の指摘は、そのプロの取材時のことでした。オプの本部で取材を受け、記者の回答の本部で取材を受け、可能な限り丁寧に収録し、望みの場面をカメラに収録した。

映画の公開に先駆けて、配給会社の 親会社である当時のソニー株式会社 に、できる限り丁寧な表現を心がけ た手紙を送りました。お伝えしたポ イントは、

①映画は、カトリック教会を邪悪な 姿で描いており、キリスト者の宗教 的信条を傷つけていること、

- ②真実のオプス・デイは、ダ・ヴィンチ・コードが描くものとは無関係であること、
- ③映画は、現実と虚構がないまぜであり、視聴者が誤った結論に導かれ、カトリックへの共感を減じる可能性があること、

等でした。そして、企業の社会的責任には、人々の信条に敬意を払う行為が含まれており、多国籍多文化で動く企業はとりわけ、注意を払うべきことであること、オプス・デイやカトリック教会を知りたい方に情報を提供する用意があることを伝えました。

手紙の英語版も用意し同時に公開しました。これを、海外の配信社が取り上げ、内外のメディアがフォローし、上記の取材ラッシュになった次第です。

その前年には、ローマで各国の広報 担当者の研修会があり、私も参加し ました。当時、教皇ヨハネ・パウロ 二世の広報局長をしていたオプス・ デイ信者のホアキン・ナバロ博士を 始め、広報分野の第一線で働く人が 講師をつとめ、とても充実したもの でした。そこで確認した対応方針と しては、可能な限り、カトリック的 な、平和で積極的なメッセージの発 信をする、誰に対しても求めに応じ た情報提供をする、ベストを尽くす とともにしっかりと祈り、祈っても らうといったものでした。

おかげさまで、結果的には、その時期にホームページへのアクセス数やオプス・デイについての問い合わせが十倍以上に増え、興味をもって近づいてくる方々とのつながりが拡大し、これを契機に信者になられた方も出てきました。

オプス・デイとの出会い

ここで、簡単に自己紹介を兼ねて、 私自身のオプス・デイとの出会いを お伝えしておきます。

曽祖父がリヨンでカトリックに出会 い受洗をして以来、私の家系は、カ トリックになり、私で四代目に幼児 ます。1958年に関西の芦屋で幼児 洗礼を受けました。幼児洗礼トリック の内容を対した。 がちなことですが、カトリック 雰囲気には馴染んでいる反面、 とはいりと信仰の内容を勉強したこと。 しっかりと信仰に向き合うには、 しっないが必要でした。 た。 た。

出会いは、中学に入ってすぐに通い 始めた英会話スクールでした。当時 は、中高生向けのクラスはなく、大 人のクラスに編入されたので、つい ていくのに一苦労でした。二十代前 半の英国人の男性教師が週末のプラ イベート補習を申し出てくれまし た。室内でするレッスンはせいぜい 三十分程度で切り上げ、先生からの 提案で、外を歩きながら続きをしよ うということになりました。今思い 返せば、レッスンの記憶より、この 先生と、六甲山を登山したり山道を 走ったりして遊んだ記憶が鮮明で す。彼がオプス・デイの信者である ことがわかったのは、本人が一年ほ どで、ロンドンに戻る直前のことで した。直接、信仰やオプス・デイに ついて聞くことはなかったと思いま す。その代わり、この人からは、信 じていることと生き方が首尾一貫し ていること、日常で特別に変わった こともせずにキリスト信者として生 きようと努めていることが、伝わっ てきました。初めて会ったタイプの 人で、深い印象を受けました。

後に、紆余曲折を経て、自分にとってオプス・デイがピッタリくると意 識するようになり、神の招き、召し 出しに応える決心をするには、さら に五年程必要でした。

オプス・デイとは

オプス・デイを手短かに言うと次の ようになります。

「日常の仕事とキリスト者としての 日々の努めを果たしつつ聖性を求め る道|日常の中で聖性を求める道と あるようにオプス・デイは、今いる 場所から取り去ることはありませ ん。信者の大部分は、既婚者で、 スーパーヌメラリと呼ばれます。比 較的若い独身時代に使徒的賜物に気 付き独身を保つ一部の人(神の国の ための独身者) はヌメラリやアソシ エートと呼ばれます。筆者は、ヌメ ラリです。既婚であれ独身であれ、 信徒であることにかわりません。普 通の社会人として、外的にオプス・ デイの信徒と他の人々を区別するも のはありません。ごく自然に振る舞 い、名刺にオプス・デイ信者と書く

こともありません。無論、秘密ではないので、適時、表明しますし、聞かれたら、そうだと答えます。

一部の独身の信徒から、司祭叙階される人が出てきます。さらに、叙階をうけた教区司祭から、オプス・デイの協力者や司祭会のメンバーになる人も出てきます。いずれも在俗司祭であることに変わりはありません。

道者を尊敬し、彼らの使徒職に敬意 を払うことはいうまでもありません が。

聖性への普遍的召命

オプス・デイは、1928年に、当時26歳のスペイン人司祭、聖ホセマリア・バー・デ・バラゲルによいて創立されました。彼はいるを要求しているで、神が何の中での照らしを受いましたが、それが何である。とは分かりませんでいるのか「見べいが、何を要求しておられるのか「見えた」のでした。

聖ホセマリアは見たことの詳しい内容を話すことはめったにありませんでした。いつも「見る」という動詞を使い、オプス・デイの全体像を見たこと、何千、何万、何十万人、何億人の普通のキリスト者が、日常生

活において聖性を求める姿を見たようです。

ここから、聖ホセマリアは、全ての 人が聖人になるよう、神がお望みで あることを悟りました。山上の説教 で「あなた方の天の父が完全である ように、あなた方も完全な者となり なさい」と話された通りです。

しかしながら、二十世紀始めのカト リック信者で、銀行家、主婦、技師 といった人が聖人になることを神が 望んでおられると聞いて、戸惑いを 覚えない人は少数派だったようで す。狂気の沙汰か異端であると考え た人もいたようです。当時の教会内 では、それまでの歴史的な経緯も あって、聖人になるためには、司祭 か修道者になるか、世を捨てる必要 があるという考えが浸透していまし た。初代教会では、普通の生活をし て、聖性を目指す「普通の道」が あったのですが、だんだんとこの道 を歩く人が少くなり、やがて熊笹に 覆われた山道のように、見えなく なっていたのです。

幸いなことに、聖霊の導きと聖ホセマリアの忍耐強い取り組みもあって、それから約三十五年後の第二バチカン公会議では、全ての人が聖性に招かれていると宣言(教会憲章第五章、聖性への普遍的召命について)され、カトリックの教えとして再確認にされることになります。

カトリック教会法上の位置付け

聖ホセマリアにとって、1928年に神が示された組織の詳細がだんだんと明らかになりましたが、当時の教で法は、それを受け入れる用意がでアは、ませんでした。聖ホセマリアに、哲定的な措置を受け入れた一方落りな方な方がある。 着いてしまわないように人々に祈りを頼みつつ、注意深く動きました。 1965年の第二バチカン公会議で、従来の教区に加えた新しい法形態として属人区(ぞくじんく)を設置する道が開かれ、後に教会法に規定と規定といういのは、区というの基準が「地域」によって分けられる従来の教区とは異なり、移民や職業・典礼等の地理的ではない基準で分けられるもので、ラテン語ではかりたっ一ラ・ペルソナリスと言われます。

1969年から教皇聖パウロ六世により、オプス・デイを属人区とする可能性が検討され始め、十年以上かけて聖座とオプス・デイによる準備作業が行われました。その結果、1982年に教皇聖ヨハネ・パウロ二世は、オプス・デイを属人区として設置しました。

この時点からオプス・デイは、「オ プス・デイ属人区」となります。 (正式名称は、「聖十字架司祭会と オプス・デイ属人区」。聖十字架司祭会は教区司祭をメンバーとして受け入れる受皿)同時にオプス・デイの代表であった福者アルバロ・デル・ポルティーリョ神父が同教皇によりオプス・デイ属人区長に任命されました。創立者聖ホセマリア・エスクリバーが帰天してから七年後のことです。

どんな人がオプス・デイに入るのか

「オプス・デイに入りたいのですが、その方法を教えて下さい。」 時々そういう電話を受けることがあります。冒頭のダ・ヴィンチ・コードの時は、立て続けにありました。

今なら、まず、オプス・デイのホームページ等で、基本的なところを読んでいただけたのかをお尋ねすることにしています。まだのようなら、いくつかのところを読むように勧めます。

そして、住んでいる地域を教えてもらい、その地域の信者と会うことを 勧めています。今なら、オンライン 面談という手もあるかもしれません。

オプス・デイに入るのは、召命を もった人に限られます。オプスれた したれます。オプスれます。オプスれます。オプスれます。それます。それの自己ないを に一定の付き合いをし、本がらとないる 適正もさることがもととないる は望んでいます。のかと はなった。のかどうかが大切になります。 を持てるのかどうかが大切になす。 では、これではないないます。

神と人々を愛する心から聖ホセマリアは、見極めの規準に関してこういっていました。「利己主義者や臆病者、無分別な人や悲観主義者、生温い人や愚か者、怠け者や気の弱い人や軽薄な人は、入る余地がありま

せん。しかし、神に愛された人である病人、そして大きな心を持つ人なら、たとえ大きな過ちを犯した人であっても入る場所があります。」

なお、オプス・デイのセンターに出入りするためには、召し出しが必要なわけではありません。実際、カトリックであろうとなかろうと多くの人がおられます。大半が信者の友人で、オプス・デイが提供する教理ク

ラスや黙想会、霊的指導に参加する 人々です。

聖性の普遍的召命に使徒職が含まれ る

すべての人が聖性に招かれていると 繰り返した創立者の聖ホセマリア は、2002年に列聖されました。次い で列福されたのが、上述した福者ア ルバロで、2014年です。2019年に は、女性信徒のグアダルーペ・ラン ダスリが列福されました。その他、 現在、列福列聖調査中のオプス・デ イの信者は、十数名います。医者、 主婦、家政婦、開発コンサルタン ト、技師、学生等です。老若男女、 独身・結婚、聖職者・信徒と、多様 な人々で、外面的には、共通点はあ りません。

共通するのは、聖性への招きをしっかり受け止め、自分の無力を心底認識する一方で、聖性に達することを心から神に希望すれば、与えられる

教会の福音宣教の責任は、聖性に招 かれている信者みなが共有して、世界 す。自身が聖化されることで、言えを を聖化する、これが使徒職と、 これが使徒職しは、の 当遍的召し出しる。 職の普遍的召しでもある憲章 33)。ともすれば、宣教や使えいっと、 生活に外から付け加えいた と、 は、教会や がらた、 は、 特定の時間や場所に限定して捉え れがちです。 多くの人が、 日常と 異なるものと無意識に誤解をしているかもしれません。

初代キリスト信者の使徒職が模範

信徒は、仕事や転居で、世界中に移 り住みます。世界を内側から聖化す るのは、信徒の義務です。初代キリ スト信者は、この義務を受け入れ、 かなりうまく果たしました。聖ホセ マリアは、この初代信者たちがオプ ス・デイの信者の模範になるといっ ていました。初代信者が生きたの は、激しい迫害時代、敵意に満ちた 邪悪な文化の中でした。教会の建物 も持たず、影響力のある組織もあり ませんでした。それにも拘らず、約 300年でローマ帝国を改宗させたの です。

その間に、多数の敬¾で英雄的な聖人がいました。多くは殉教しました。後らの証と勝ち得た恩寵を過小評価をすることはできません。しかし、古代世界のコミュニケーション

手段を考えると、ある人の英雄的な ふるまいや殉教のニュースが、僻地 のキリスト信者にまで届くには、お そらく数ヶ月かかっていたことで しょう。その間、普通のキリスト者 は、畑を耕し、商品を売買し、家事 に携わって生活していました。

初代信者は、使徒職を実行しました。しかしそのやり方は、現代の多くの信者が考える使徒職とは、異なっていました。教会のミサやバチー、コンサート等に人を誘うことはしなかったし、そもそもできなかったのです。当時のミサは、閉鎖的な集まりで、個人の家で行われ、仲間だけに開かれていました。

初代信者は、練り粉の中のパン種のように、静かに、世の中を内側から 聖化することに成功しました。二世 紀に書かれた「ディオグネトスへの 手紙」に詳しく書かれています。彼 らは、自分たちの仕事をして、世界 を改宗させた、つまり、神の仕事を したといってよいでしょう。第二バ チカン公会議の言葉を借りると、普 通のキリスト者は、

「信仰、希望、愛の輝きをもって、 特に自分の生活の証を通して、キリ ストを他の人々に知らせた。」(教 会憲章31)ということになります。

聖ホセマリアは、普通のキリスト信者に、現代においても同じような慎ましい、しかし効果的な福音化を勧めました。それを、「友情と打ち明け話の使徒職」と呼びました。

聖性と使徒職は、イエスと私、私と 友人とのそれぞれの友情が深まるこ とで、私を介してイエスと友が出 会い、友情を深めるというイメージ で、大工を入るというないの で、イエスと私の友情が深まること と、私と人々との友情が深まること は、無関係なものではなく、私 してイエスが、友人達に出会い、招 かれるのです。友人達の大部分に は、大部をしていないないないないないないないないないないないないないないないないでにスターが二人のではあるす。ご聖体を始めつきましている。ですることであることではいるにいるのででは、ありでではないではないではないであることではいるようではいるにいるというではないです。

仕事の聖化

求職中の青年は、ある日、自分の小教区で、シスターから「あなた、仕事を探しているのなら、仕事の聖人である聖ホセマリアに祈ったらいいわよ」と勧められたと聞いたことがあります。

確かに聖ホセマリアの創立したオプス・デイは仕事の聖化を強調します。ここで言う仕事は、専門職、家事、求職活動、闘病、その他、人の

活動の全てを指す通常より広い意味です。仕事は、重要なものですが、 それが全てではありません。せいぜい大事なものの一つという感じです。

仕事の聖化を邪魔する一つは、仕事中毒です。かなり多くの人が、アメリカのコメディアンのビル・ブーイ主演の映画「恋はデジャ・ブ」の主人公のように、エンドレスの労働の世界に紛れ込んでしまっています。黙示録の獣の唯物論に屈服した人は、額に666の印がつけられました。六日目が繰り返される、つまり七日目の休息がないのです。

また、パンデミックがきっかけになり、テレワークが劇的に増え、移動時間が減った反面、労働時間が増えたと聞きます。仕事の時間が、家族や休息の時間にますます入り込み、メリハリが失われ、疲弊している人もかなりいるようです。また、若い

人は、オンラインでは、リアルな関係が希薄なことによりストレスを感じやすいようです。

仕事中毒によっても、失業や生活不 安によっても、人間の本来の生き方 ができなくなります。挑戦し、課題 を解決しよう、なんとか算段しよう と、それだけにエネルギーを傾ける ならば、取り組んでいることに隷属

生活の中心であり源であるミサ

主の日を聖とする命令は、休息する、立ち止まって考える、力を取り戻すというだけではなく、礼拝することです。礼拝なしで、仕事や仕事さがしは、乱雑になり、疲弊しがちです。礼拝は、仕事同様に、人間の基本的な必要事です。両者は、正しい割合で調和されるべきものです。

礼拝の中心は、ミサです。オプス・ デイがカトリック教会の共通善に寄 与したことの一つは、「ミサは、キ リスト者の霊的生活の中心であり源 である」との聖ホセマリアの教え で、このフレーズは、第二バチカン 公会議の公文書「司祭の役務に関す る宣言 | 十四番に採用されました。 主日だけでなく、オプス・デイ信者 は、可能な限り平日にもミサに参加 します。(コロナ禍でミサが中止に なるか、もともと地域によってはミ サがない場合には、秘跡的に参加す るわけではないにしろ、世界中でオ ンライン中継されるミサを視聴し、 霊的聖体拝領を唱えることも可能で す。) 一日を、ミサ中心に半分にわ け、ミサの前の半日は準備に、後の 半日は、感謝にあてるよう、聖ホセ マリアは勧めました。

ミサは、一日の中心となることで、 どこで何をしていても、ミサの延長 となります。研究所の実験台や、ク リーニング店のアイロン台、台所の まな板、テレワークの画面の前は、 いわば、ミサを捧げる祭壇であり、 そこから永遠最高の祭司であるキリストの御ミサを続けるというイメージです。また、ミサから、あらゆる活動のために必要な力をいただくことができることも、聖ホセマリアは教えました。これが、ミサが霊的生活の源であるという意味です。

オプス・デイの信者は、ミサに加 え、念祷、ロザリオ、良心の糾明と いった一連の日課を生活に組み込ん でいます。週単位、月単位、年単位 の霊的育成の機会もあります。これ らは、各自の生活の状況に応じて、 とても柔軟にフィットするもので す。リストアップするとかなりの数 に上りますが、誰も初めから全てを 実行するように求められるのではな く、長い緩やかな坂道を、一歩一歩 登るように、徐々に実行するように **導かれ、気がつけば、春夏秋冬あら** ゆる時と状況においても「生きる」 ことができるようになります。

霊的に寄り添うこと

私の生業は、主として学校・病院・博物館・NGO等の非営利組織の資産管理やマーケティングの手助けをするコンサルタントです。これとは別に、

ライフワークとして、個別面談の形で霊的に寄り添うことを四〇年程をいているました。記録をとって間にもまいが、というではないですが、と計算ではないの単位であるうちに確けである。回数を重ねるうちに確決かからではない道具ではないがあるとはないがあるはいで動かれるのは聖霊で働かれるという思いです。

二十代の駆け出しのころは、こんな若造が相手の話を聞き、有意義な勧めを与えられるのかと、少々不安に 思うこともあったのですが、ひとこ ろから、指揮者は聖霊であり、聖霊がその人の中でその都度方向性を示され導かれること、こちらのするれきことは、相手が種々のとらわれたら解放され、神の促しや霊感に、なら解放され、神の促しや霊感になるようサポートすることがわかり始めている。 であるということがわかり始めている。 肩の力がぬけたように思います。

大半の方とは、毎週~二週間に一回 のペースで面談を持ちます。始めは 相手の状況や背景を含めてじっくり と話すために30分以上になることが 多いのですが、同数を重ねるにつ れ、特別なことがなければ、15分程 度のやりとりで済むようになること が多いようです。霊的進歩の知恵の 一つには、「よりシンプルに」とい うものがあります。だれでも始め は、自分の内面については、よく把 握していないし、話すことに慣れて いないために複雑に述べがちです。 率直誠実に話すように務めるなら、

徐々に単純明快に理解し話せるよう になってきます。

現在、定期的に面談しているのは、 学生、教員、研究者、営業マン、エンジニア、医者、映画監督、介護な事者、ガードマン、主夫、定年者は、病人など多岐に渡ります。多面談は、コントしました。職場だけでないる大のそれぞれの場で、 に合致した生活を果たそうと務めている方々です。

キリストにおける神の子という究極 の宝

一人として同じ人はいない、それぞれの道があり、神は一人一人のためのシナリオを持っておられるようです。しかしながら、霊的生活の道では、本人が意識しているかどうかはまた明確な形で現れるかどうかは別にして、転換点とでもいうポイントを通過するように思います。人に

よっては、転換点の通過は、霊的な 夜と呼ばれる形で現れます。今まで 感じていた霊的なことに対する喜び を失い、闇に閉ざされたように感じ る時です。より多くの人には、事業 の失敗、困難、病気、愛する人との 別れといった誰にでもありうる経験 を通してもたらされるように見えま す。神は、当事者が今まで、自身が よりどころにしていたことを離れ、 神の慈しみにより無償で与えられた 「キリストにおける神の子」という 身分、無償で与えられた宝にのみ希 望を見出すように導かれるようで す。

教皇フランシスコは、説明します。 「わたしたちのだれもが、夜に、人 生の夜に、たびたび訪れる人生の夜 に、神と会うことになります。それ は闇に覆われたとき、罪のとき、危 に迷っているときです。そうしたと きに、わたしたちはつねに神と会い ます。思いがけないときに、本当に 独りぼっちのときに、神はわたした ちを驚かせてくださいます。そのときに、神はわたのでくださいます。そのとなる人間――だとなりのように自分がありまれる。これることははいるであれる。ときないではないではないではある。」(2020年6月10日 般謁見演説)

皆様にとって当たり前のことかもしれませんが、私にとっては、聖書の多くの箇所がこの内的変化への名であるように感じています。例えるであるように感じています。それであるように感じています。最初にある。まればないとたちのものであるようないとたちのものである。まればなら、私は衰えねばならない」(マテオ5、3)を始め、「あの方はヨマテオ5、3)を始め、「あの方はコではなく、私の中にキリストがいきて

おられる」(ガラテア2,20)、地上ではなく天に宝を積む教え(マテオ6,19)畑に隠された宝をみつけ、持ち物を売り畑を手に入れる教え(マテオ13,44)などです。

ある日、レオナルド・ダ・ヴィンチ の仕事場にやってきた人が質問しま した。「どうやってこの大理石の塊 から作品を作るのですか? | ダ・ ヴィンチは、答えました。「モーゼ 像は、この大理石の中にすでにあり ます。私のすることは不要なところ を取り去るだけです」。私たちにも 同様に、すでに心の中に、聖性と使 徒職への招きを受けとっており、将 来、神と対面する時に明らかにな る、神の栄光に照らされて輝く究極 の神の子の姿を秘めているのです。 やるべきことは、自分をあるがまま に受け入れ、聖霊が私たちを、形作 り、不要なものを取り去ることに抵 抗せず、毎日をイエスととも歩いて いけばよいのです。父の家にかなら

ずたどり着ける希望をしっかり胸にいだきながら。

オプス・デイの活用の仕方

最後に、一般の方々にとって、どのようにオプス・デイを、利用すればよいのかヒントとでも言えるものを掲げておきます。

- インターネット情報
- 書籍
- 直接連絡

① オプス・デイのホームページ

「オプス・デイ HP」と検索してくだされば、トップに公式ホームページがでてきます。日本語を含む各国語に対応しています。オプス・デイに関する説明、種々の記事が掲載されています。上の帯の「信仰を育む」のコーナーは、教理や祈り方を解説していてお薦めです。

② 聖ホセマリアの著作を読む

「escrivaworks」と検索してくだれば、でてきます。聖ホセマリアの著作で一般向けのものが各国語で読むことができるものです。全文検索が可能です。(日本語については、検索機能は現在準備中です。)

- ①聖ホセマリアの著作
- ■「道」 新装改訂版が 教友社より 2021年4 月に出版

1934年の初版以来、あらゆる人種、 国、社会的文化的階層人びとが、こ の著作によって神を知り、光と力と を見出してきました。各国語に翻訳 され、発行部数が数百万部を越えて います。

②オプス・デイの信者による本

■「天と地をつなぐ道: 聖ホセマリア・エスクリバー」、中井俊已著、 ドン・ボスコ新書

聖ホセマリア・エスクリバー神父の 生涯や聖性についての小伝。

- ■「聖性への招き一ふつうのおばさん、おじさんも聖人に」、酒井俊弘著、教友社仕事を通して聖性にいたる道を説くオプス・デイを、ユーモアに富んだエピソードを交え、わかりやすく解説。オプス・デイ信者の日々の務めの解説もあります。著者は、現カトリック大阪大司教区補佐司教。
- ■「オプス・デイとの出会い一私の 霊的な旅」、スコット・ハーン著、 エンデルレ書店キリスト教福音派か らカトリックに改宗した神学者の著 者が、オプス・デイの創立、使命、自 身に与えた深い影響を説明する。一 個人の感動的な話であると 同時に、 現在における霊性について多くを教

える作品。日本語版は、残念ながら 絶版だが、英語版 "Ordinary Work, Extraordinary Grace" は、手頃な値 段で入手可能。

オプス・デイは、一般の方を対象とした、個別・グループでのプログラムを提供しています。主な狙いは、カトリック信者として基本的に知り実践しておくべきこと、PCに例えるなら、カトリックとして生きる上でのOS(オペレーティングシステム、基本ソフト)をインストールし、個別調整の手伝いをすることです。

ご興味のある方は、最寄りのオプス・デイのセンターに問い合わせるか、広報室にご連絡をください。

オプス・デイ属人区信徒

稲畑誠三

この文書に関するお問い合わせ先 稲 畑誠三 Seizo Inabata seizoina@gmail.com

2022年3月

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/opus-dei-tono-deai/ (2025/11/27)